

滋賀縣尋常	中學校藏書	部類	冊號	記号	冊數
		雜		〇	五

續
近世
畸人傳

四

781
48
Vol 4

滋賀縣尋常中
学校藏書印

續近世時人傳卷之四

僧 正山

附僧之度僧月舟

正山和尚の備後の人にして却して家産とすべし。歳すも佛
よ仕へ終ふとまら。性敏悟亮達智くはして極人と誦し。
るがごとく詩と作る。又母をんよるさく月舟和尚よ
授して出家とす。十三歳の時亡父乃養ふまらつてあど
いつの時母氏よと抱て曰。汝人すまをせん」と教へん。
宗音と名くことぶくわんし。師よきて勿忘と示さる。と。
中庵の巻渡りしはよき。十九歳の時出家の事言ふ
あり。あるは月舟和尚よはあつて性敏と師の同く
き。帰依の極越よと名く。つらまの事とす。ふふふ
が忽ちしてあり。師とあては同と。師よんよあて

二月三日新廟遷座の儀成。勅使あり。辛巳八月

廿八日大御君六孫王後親の五文字と御之り。乃

りて得入。水戸黄門光圀御も子と為入

六孫王御墳墓年之廢額之處。今度新額

御修。覆々中御重々事存以。誠源家。氏神御

と御懸愛。御事過之御事。御存之。同御之。皆

人。一御奉存。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

信仰。御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

備仲者。源家。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

多。御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

七月六日

光圀

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

御存之。御事。御存之。御事。御存之。御事。御存之。

八月十一日

光國

通思の院

豪慈の尚
祝座下

享永丁亥四月六日又命より。庫米百石と賜ひ奉祀
 の事となす所なり。又中古の米も充の然廢せしむ
 古紙と物切。きとるふ。成る米中より。其の米有。其
 と。も。そ。蔵。に。任。せ。し。り。拜。龍。顔。に。向。ふ。不。易。の。局
 同。く。又。本。林。院。と。再。造。し。銀。細。の。山。門。の。改。修。と。も。ま。し。り
 か。く。も。其。の。事。な。り。た。所。社。や。親。隣。の。の。ふ。ぬ。よ。修。繕。乃。志
 と。起。し。又。向。戸。に。せ。し。り。享。保。庚。戌。米。六。月。十九。日。寺。社
 自。小。山。信。儀。侯。より。其。令。と。納。り。且。令。ま。し。り。此。令。二。も
 こ。し。一。も。い。く。な。修。葺。の。料。と。し。一。も。い。く。母。の。藏。館。と。し。

修。葺。儀。候。の。由。ふ。亮。と。し。於。是。廟。社。令。善。ま。と。修。葺。
 壬。子。と。し。又。向。戸。に。由。ふ。修。繕。と。納。し。且。新。画。開。國。
 乃。社。額。と。加。他。遠。に。候。ふ。事。の。候。奇。休。と。掲。げ。し。
 是。之。何。包。ふ。儀。は。火。起。り。強。候。の。策。に。乃。ん。と。せ。り。
 俟。り。西。月。空。く。火。と。納。し。一。時。も。觸。る。こ。し。ら。り。
 の。也。甲。亥。米。正。月。太子。降。誕。博。士。御。胞
 教。と。納。り。比。と。ト。と。ら。に。此。心。を。な。り。し。り。
 乃。折。下。に。納。り。し。り。其。の。も。く。其。の。基。趾。と。ま。り。又。月
 十日。神。と。紫。衣。と。賜。ふ。所。及。ま。不。行。乃。倒。と。ん。と。れ
 且。し。り。其。と。修。繕。と。其。の。こ。し。に。成。り。凡。そ。修。繕。の。事。
 の。事。と。し。て。毫。差。も。身。乃。あ。ま。し。り。た。て。お。ま。り。し。り。
 又。小。部。の。題。掲。見。の。時。奏。者。も。ま。し。り。と。な。り。し。り。

眞如といふがごときと著す。清上人。毎んちよされに流る
 きぎはく一編。またよつた。またよつた。またよつた。またよつた
 吾らよつた。吾の精舎が。吾の精舎が。吾の精舎が。吾の精舎が
 と名と名の。功と害らふ。功と害らふ。功と害らふ。功と害らふ
 記とよつた。吾と孫。孫と。孫と。孫と。孫と。孫と。孫と。孫と
 信言もよつた。入丹。克己録一冊。八景法帖一冊。入道書用
 山室師の景純一冊。初華信息一冊。龍久待徳許家
 ちりかよつた。吾と。吾と。吾と。吾と。吾と。吾と。吾と。吾と

吾中早春試毫

江漢為客如逢春

且善聖朝寓此身

山納主筆衣袂志

且期神運與子新

上堂日寄二三子

標本從末不足量

山僧何事立傍觀

大塊假我操持力

他日儘堪為棟梁

渭松下袖之帚長

及のりよく掃ふる叶とハ康公の兄

又老猿江戸乃寓居

可奉十二道也

我ハ加藤式ヲ考補内子ハ一教トラスあり

之ノ最久キ帚ハ也傳付人持止トシテ如念ハ

吾ハ付テ其縁致ス也切腹立長延知レリ所領主

チウ。當人ハ武門毎ノ中ハ切腹ヲシテ下座

キレシ出頭シ。キレシ名キルキ縁致スルを以テ也

流レノ中ハ付。甲斐其切腹ヲ傳付。後ハ其ノ

石浜若ぬれもいふなり

千石をもちて申す。ふり。又京にありて人ふとていふ。御
所とありて。人ふや親の御所と申す。とて。御家
病みして。ふり。とて。御所と申す。とて。御家
ら。とて。御所と申す。とて。御所と申す。とて。御家
い。とて。御所と申す。とて。御所と申す。とて。御家
あ。とて。御所と申す。とて。御所と申す。とて。御家
ふ。とて。御所と申す。とて。御所と申す。とて。御家
る。とて。御所と申す。とて。御所と申す。とて。御家
官。とて。御所と申す。とて。御所と申す。とて。御家
ま。とて。御所と申す。とて。御所と申す。とて。御家

九口旅なる。京都とある。はら。信。二人。毎。下。新。一。人
い。と。一。人。の。信。を。御。所。に。持。来。り。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
ま。と。一。人。の。信。を。御。所。に。持。来。り。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
村。御。所。の。信。を。御。所。に。持。来。り。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。

高。御。所。の。信。を。御。所。に。持。来。り。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。
一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。一。日。づ。つ。一。つ。づ。つ。と。

芳洲名森氏名誠信字伯陽生於赤松又稱本下孫也の
 門下遊く新井白石定信集紙園南陽の緒老を以て
 小名松天下に成てり。京師乃人として馬馬乃文學
 とまり。尚くは昇進とまきとありて一廣音韓字と
 して通漢。韓人好慕し終つて二國の事のしらふ
 事やその本よりわたりしものあり。わたりて吳邦
 乃書と通人小行辨するとかじし。漢書大宛儒をうわむ
 して遠言の故のゆゑにたるといふし。しりて人通交と
 本でる獨意茶話とてわたりのしりたる。一時借因れ
 隨筆のこゝにもその氣概とて博聞とありてそのれ一
 端のこゝに著録しりて感んする。一件の暖燄天竟と家

表長老日吉森を乞へ贈りてし俗牘二冊あり
 自坊之秀院あり。極老の及國寺小志と稱と
 をされし書へ。そのわがむむらうらぬる嘆美とてふ
 のあり。老てらんく壯遊しやいりて古人の心をな
 似し。初ふきを因り夕の死もも可くしてしを流
 して懋つたものあり。一條ありゆりてそを奉文れ漢
 字にせむりてまふより代極執押てあり。半牘た
 小獨く。吾友春日庵榮州坊也。其先世莊子ともも通漢也。其れ
 るん。坊の經をいりて物ん。信書も通漢自通也。其れ
 蕭草法師抄ありて此の通書も亦は内新書とて信
 箱より相違ふお見せはる。江戸世國はしりて其れ
 生能敷けはる事とも有り。けえ不お智れはるを
 ありしるるをたてし。此れはらるるん下おし。しりて系

右の通漢海に於て我々の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

是の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

是の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

是の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

是の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

又二通

る森しよあす

重編 此の久しき書も
又老若とも書にあり

又二通 此の久しき書も
又老若とも書にあり

此の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

此の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

此の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

此の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

らに辨す

此の久しき書も
又老若とも書にあり

此の功績は如何なるに
しや。壽命の長かりしは如何なるに
しや。

女海と流し... 親族集... 婿と孫... 女海と流し... 婿と孫... 女海と流し... 婿と孫... 女海と流し... 婿と孫...

信華一姫女

信華一姫女... 婿と孫... 女海と流し... 婿と孫... 女海と流し... 婿と孫... 女海と流し... 婿と孫... 女海と流し... 婿と孫...

本三洋摩女

Main body of handwritten text on the right page, written in a cursive style.

Second column of handwritten text on the left page.

Third column of handwritten text on the left page.

Handwritten text in vertical columns, likely a religious or philosophical treatise.

Handwritten text in vertical columns, likely a religious or philosophical treatise.

其十坪の金部たるは、
不純と云ふ事。其等なる者人あり。其園及びは、

細く、

其、
の、

附板倉伴貞寺為京郡と身續し、
の、

其、

其、

其、

其、

其、

其、

其、

其、
其、

其、
其、

其、
其、

其、
其、

其、
其、

其、

其、

